



多様な同窓生のために ——「Rainbow Reunion」開催に込められた思い

2018年6月2日(土)、CGS(国際基督教大学ジェンダー研究センター=Center for Gender Studies)が主催する「第4回 Rainbow Reunion」がアラムナイハウス 2階ラウンジで開催された。その開催経緯と参加者の声をレポートする。

文:安楽由紀子(本誌) インタビュー協力:CGS 写真:CGS

「Rainbow Reunion」は、「Reunion」とは銘打ってはいるが、ICUでジェンダー・セクシュアリティを学んだ人だけでなく、そうでない人にも広く門戸を開いている。今回の参加者は22人。内訳は、ICU教員2人(退職者1人を含む)、在学生4人、卒業生15人(スタッフ含む)、三鷹市民1人。軽食を囲み、和やかに3時間ほどを過ごした。

第1回が開催されたのは2015年。そのきっかけは、学生の夢を応援する目的でICU同窓会が主催した「ドリコン」(Dream competition)のできごとだという。ある年のドリコンに、在学生3人がアジア圏でのLGBTの連帯を目指して結成したグループ「Asian Rainbow Union」が応募。そのメンバーの一人である卒業生(ID17)は語る。

「ドリコンには、LGBT学生による国際会議をダイアログハウスで開催したいという企画を提出しました。ドリコンでは資金だけでなく卒業生とのつながりも提供してもらえという話だったので、『社会に出ているICU卒業生の性的マイノリティ当事者とつないでほしい』ということも提案しました。ところが、審査では『社会で働くことと、LGBTであるということは全く関係のないこと。そういうことをオープンにして働いている卒業生はいないから、つなぐことはできない』といったことを言われたんです。すごく悔しかった。悔しくて、すぐにCGSに行ってわーっとそのことを話しました」

CGSの職員を7年ほど務めていた加藤悠二さん(ID06/G2008)は、当時この話を聞いて、Rainbow Reunionを企画した。

「『卒業生にはそういうことをオープンにして働いている人はいない』『サポートしてくれる卒業生なんかいない』『繊細なテーマだから、慎重に扱わなければいけない』などと言われたという話を聞き最初に感じたのは『学内でゲイであることをオープンにしていますけど、何か?』という、卒業生であり労働者でもある私自身をないがしろにされた怒りでした。もちろん自分以外でもICU卒業生に当然LGBTの人はいますし、自身がLGBTでなくてもサポートティブな人もたくさんいます。卒業後に広くカミングアウトをしている人も、そうでない人もいますが、少なくとも『LGBTの 이슈は繊細で語れない』『サポートしてくれる卒業生がない』ということはありません。卒業生の多様性にICU同窓会が全く目を向けていない現状に対して物申したい。『卒業生にLGBTはおらず、みんな結婚して、子

どもをもうけ、その子どもがまたICUに入学して……』といった単一的な価値観に則つとらない卒業生像・在学生像をきちんと作っていくべきだと思いました。同窓会に対して抗議をすることも考えましたが、それよりは、アラムナイハウスにレイボーフラッグを立てて、みんなでオキュパイするほうが楽しくない? と考え、Rainbow Reunionを企画をしました。やることはピザパーティーなんです(笑)。『私たちがここにいること』『他の同窓生と同じように、当然のこととしてアラムナイハウスを使うこと』が大事だと思ったんです。また、参加費から出た収益は、2014年から設けられた学術奨励賞『ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞』の奨励金として、用途指定寄付をしています。卒業生と在学生のつながりを、学びを応援する、という形でも作りたい、と考えたからです」

“同級生”の感覚が初めてわかった

今回の参加者たちは、在学時はCGSにおいて、卒業後はこのRainbow Reunionを通じて、安心やつながりを得てきたと一様に語る。

「今、会社員として勤めています。会社でジェンダー・バイアスがかかった会話があっても、『それは違うよね』と指摘すると『え、何こいつ?』みたいな雰囲気になってしまう。自分を抑えてその場しのぎのように過ごしているの、とどンドンモヤモヤは溜まっていく。Rainbow Reunionのような場でモヤモヤを感じずに話せるのは、すごくいいこと。ぜひ今後も開催していただけたら、私のようにこうして心が救われる方も、今後も参加したいって思う人もたくさんいると思うので、続けてほしいです」卒業生(ID12)

「新入生です。ICUにCGSが存在していることにより、学生生活に“安心”を感じています。今回Rainbow Reunionでは、同窓生の方々にもお会いすることができ、CGS設立のお話を聞くこともできました。多くの方々の気持ちが集まっているCGSに温かさを感じました。ICUの学生として、CGSはとても大切な場所です」学部生(ID22)

CGSは、ジェンダー・セクシュアリティ研究に関心がある人に開かれた、新しいコミュニケーションスペースとして、2004年4月に発足した。それ以前に卒業した同窓生にとっては、こうした対話のできる場が学内に存在すること自体が、考えられないことだったという。

「自分が卒業するときに、こういう日が来るとは思わなかった。在学中に同性の人と付き合っていて、たくさんロマンスもあったけど、絶対誰にも言えないって思っていた。自分のやりたいことや夢みていたキャリアは実現してきたけど、自分のセクシュアリティを大学の人とシェアできる日がくるなんて、本当に思わなかった。みなさんに感謝です」(ID99)

「在学中も、会社勤めを始めてからも、性的マイノリティの人といっぱいおつきあしている裏の生活があるんですけど、それぞれの点を全部つなぐのがやっぱりここ。それぞれの場での仲のいい人と話していても、いまいわかり合えない部分がそれぞれにあるけれど、ここは全部重なっているから話が早い。普通の人が言っている“幼なじみ”とか“同級生”ってもしかしてこんな感じかなと思う。“私たち”には“ふるさと”がないけど、このReunionで作れたような気がする。ぜひ続けて、この感覚をぜひこれからの若い人たちにも味わってほしいし、今まで参加したことのない人にも来てほしい。貴重な場所だと思います」(ID95)

「いないことにされる」という現実がある

CGS設立前に卒業した同窓生の間では、こうした活動があることがあまり認知されていない。CGSのウェブサイトやFacebookとTwitterで情報が発信されているが、そもそもCGSの存在を知らなければそこにアクセスすることもないだろう。

CGS設立者で現在は顧問をつとめる田

中かず子元ICU教授は語る。

「CGSは、学内外に開かれた『誰でも自由に入出入りできる場』として始めたのですが、退職してキャンパスの外に出て、一市民の目線で見ると壁があって、CGSにたどり着くことは難しいと実感しました。地域コミュニティの中にはこういうセンターが全くなく、ほとんどの性的マイノリティが“いない”ことにされている、もしくは“いない”状況を前提とした生活が続いている」ということをひしひしと感じています」

田中元教授は、ゆくゆくは地域の中にも「ダイバーシティ・センター」を作り、こうした状況を改善していきたいと展望を語った。

冒頭でも述べたが、Rainbow Reunionは卒業生や当事者に限定しない開かれている会である。

「幅広くジェンダー・セクシュアリティに関心がある人であれば誰でも参加できます。ここに“集まる”こと、このアラムナイハウスという場所を使って、レインボーのもとに集まりたいという人が集まれることが大事だと思っています」(加藤さん)

「一人ではない」というメッセージを伝えたい、この輪を広げていきたい——Rainbow Reunionは今後も継続的な開催をめざし、一人でも多くの参加者を募っている。

CGSウェブサイト

<http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Twitter https://twitter.com/icu_cgs

Facebook <https://www.facebook.com/icu.cgs/>